

## ▶ 文革記念館建設を提唱した巴金

1984年、巴金は東京で開催された国際ペン東京大会に出席するために、中国ペンクラブ会長として来日しました。一行は巴金を含めて4人、その中に、文芸誌『収獲』の編集者でもある令嬢の李小林も参加していました。巴金は1904年生まれ、ちょうど80歳です。李小林の随行は、父の身体を気遣った参加だったともいえるでしょう。

巴金は若いころ、アナーキズムの影響を受け、四川省の成都の家を出て上海や南京でアナーキズム運動に参加、後にフランスにも留学しています。本名を李堯棠リキョウドウと言いましたが、巴金というペンネームは、アナーキストの理論的指導者だったバクーニンのバ、クロポトキンのキンを取ってつくったといわれていますが、今回改めて調べてみると、〈巴〉は自殺した友人の巴恩波からとったものだとする文章に出会いました。そして、バクーニンとクロポトキンからとったという説は、文化大革命時代に、巴金に罪を着せるためのデマであり、事実ではないと書いています。どうもこの説の方が、リアリティーがあるように思いますが、さて真実はどうだったのでしょうか。それはともかく、御多分に漏れず、文革の嵐は巴金にも襲い、1966年から10年間ほど作家活動もできませんでした。

巴金は、文革の悲劇は二度と起こしていけないと、1986年に文革記念館を建設すべきと提唱しましたが、残念ながら実現していません。ともあれ、巴金はアナーキズムに心酔し、またエスペラントにも共感、1920年には彼も参加して上海世界語協会を設立し、エスペラントイストとしても活躍しました。

巴金は1961年、中国からの最初の作家代表団の団長として来日、1984年時点ですでに4回ほど日本に来ていますが、1984年の来日時には、文芸理論家で中国文学芸術連合会主席の周揚らも

ほぼ同じ頃に来日し、5月11日、彼らは揃って東京で開催された日中文化交流協会(1956年に中島健蔵、千田是也、井上靖、團伊玖磨らが中心になって日中間の文化交流を推進するために創立され、日中国交正常化に貢献した)主催の歓迎パーティーに出席しました。

## ▶ 熱気に満ちた歓迎パーティー

パーティーでは一目、巴金に挨拶し名刺を交換したいという人たちが巴金の前に並びました。巴金は椅子に腰かけ、そのそばに男の人が立ち、その人が巴金に代わって名刺を差し出していました。私も巴金に挨拶すべく並びましたが、後ろに何人かいるため、ただ挨拶し名刺を交換した程度でした。

そのパーティーは、当時の友好的な日中関係を表し、とても熱気に満ちていました。文革中の閉ざされた日中関係に終止符を打ち、開放経済体制に入った新しい中国との緊密な交流関係を反映するかのよう、日本を代表する多くの著名な文化人たちがパーティーに参加していました。

今回、巴金の来日時を確認するために、日中文化交流協会に尋ねたところ、広報部の方が8頁に亘る記事をコピーしてFAXしてくれました。

現在でも日中文化交流協会の月刊の会報「日中文化交流」は、主要な行事の参加者の名前が逐一、アイウエオ順に記載されていますが、この時も多くの人たちの名前が記載され、私の名前も記載され

ていたのを今度初めて知りました。

参加者の名前を眺めていると、鬼籍に入っている人もかなりいますが、文化芸術関係の著名人が綺羅星のごとく紹介されています。大作家である巴金が出席するというパーティーとはいえ、いかに当時の日中関係が熱い状況にあったということがわかります。

そんな著名な方々を全員記すと、この頁はその名

混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ！」  
エスペラントイスト巴金の来日

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおるいよしひろ)

前で埋まってしまうかねませんので、とりわけ一般的に名前が知られている人たちだけに限って紹介してみましょう。

日中文化交流協会会長の井上靖を筆頭に、千田是也、山本健吉、東山魁夷、野間宏、水上勉ら協会の常任理事の他に、井出孫六、岩波雄二郎、大原富枝、岡崎嘉平太、岡本太郎、奥野健男、尾崎秀樹、加山又造、木下順二、清岡卓行、熊井啓、黒井千次、近藤芳美、阪田寛夫、佐々木基一、佐田稲子、城山三郎、高木東六、高峰三枝子、陳舜臣、東野英治郎、中園英助、中野孝次、夏堀正元、奈良本辰也、古井喜美、宮本輝、三好徹、森繁久彌、山本安英などの名前が並んでいます。まさに日本を代表する文化人たちが参加していたのです。

また井上靖の『楼蘭』のエスペラント訳『Loulan』がその日に完成し、井上が巴金に贈呈した関係もあってか、エスペラント界の主要な人たちも参加しています。

### ▶ 歓迎パーティーで見た有吉佐和子の喜び

この会報に掲載された写真のキャプションを見ると巴金は、「友情に対しては友情で応えねばなりません。しかし、みなさまのこのような大きな友情に、私たちが応えられるだろうか・・・」と挨拶しています。また周揚は、「私は五年ぶりに日本の土を踏みました。長年の友人であり、同志である巴金氏と同じ壇上でこのように多くの人々のあたたかい友情に見守られていることは、感無量です」と挨拶したと記されています。

この他にも会報には、井上靖や千田是也、東山魁夷、陳舜臣、佐田稲子らが巴金、周揚と親しく言葉を交わしている写真が掲載されています。このような今は亡き日中の文化人たちの懐かしくも深い友情を示す写真を見ていると、改めて現在の冷めた日中関係が浮かび上がってきます。

著名な文化人が大勢いたパーティーの中に私もいたわけですが、印象に残っているのは高峰三枝子がいたなというぐらいです。しかし、実はこのパーティーで今でも鮮明に覚えているのは、今は亡き有吉佐和子の燥ぎっぷりです。

「才女」と言われ、女流作家として華々しい活躍

をしていた有吉ですが、周揚が壇上で挨拶している時、会場中央のやや後ろの方にいた有吉が周揚に向かって大きく手を振り、声をあげたのです。会報「日中文化交流」を見れば、有吉と周揚が言葉を交わしている写真があり、そこには「5年前には、杉並のわが家を訪ねてくださいましたね」と有吉が語り、周揚が「あのときの抹茶の味は忘れられません」というキャプションがついていました。有吉の燥ぎっぷりは、そのような付き合いがあったからでしょう。しかし、それを差し引いても異常な感じを受けました。

1961年の最初の訪中の時、有吉は、ある人から「着物はなるべく地味なものを」と言われたそうです。しかし中国での歓迎レセプションではその忠告を無視したようです。

その時の訪中団長だった亀井勝一郎がこんなエピソードを書いています。

「今度の旅行中、有吉さんが最も人気があった。宴会の時は、華やかな和服を着るので会場が一際あかるくなるし、〈絶世的美人〉といふ名が高い。我々の世代とちがって、ものに臆することなく、闊達に振るまうので誰からも好意を持たれたやうである。(中略) 郭沫若氏との会見後にも記念撮影したが、そのとき郭氏は、有吉さんに向かって〈こっちへおいで〉と言って自分の傍へ連れて行った。今度もいよいよ撮影する瞬間、私と並んで立っていた周総理は、あっといふ間に有吉さんの傍へ行ってしまった」(『中国の旅』)と記しています。

また、かつて私が見た写真の中には、二列に並んだ集合写真の前列中央にいる周恩来の隣に有吉がいました。なんでもその時は、一番端にいた有吉が撮影直前に周恩来の傍に駆けていき、写真に納まったといわれています。有吉の、ものおじせず、積極的な性格がそうさせたのでしょうか。

また周恩来とのエピソードでは、有吉が周恩来に、「今日の私の着物の柄が牡丹(中国の国花)でなくて残念です」と言ったところ、周恩来は「牡丹はあなた自身ですね」と返したということです。周恩来もなかなかユーモアがありますね。

(続く)